

## 姉崎正治の宗教意識の形成

古賀, 元章  
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1905857>

---

出版情報 : *Comparatio*. 20, pp.1-10, 2016-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 姉崎正治の宗教意識の形成

古賀元章

はじめに

後に国内外で著名な宗教学者となる姉崎正治（一八七三—一九四九）が宗教意識に目覚める原点は、家族の者が信仰心の厚い生家にある。幼少期の姉崎の宗教意識は、両親の家業の観察、勤行やお寺参りを通して祖母の行う日々の躰によって養われている。生家を訪れた二人の僧侶の話は少年期の姉崎に、宗教を学問として勉強するきっかけを与える。同じ頃に通学した私塾で彼は、宗教の進化についての科学的な解釈を学ぶ。姉崎の宗教思想の萌芽は、幼少期を生家で過ごした家庭環境に見ることができるよう思われる。

そこで本稿は、右述した姉崎の幼少期の出来事に注目して、彼の宗教意識がどのように形成されていったかを指摘したい。（注一）

### 一 姉崎家の系譜と家族

姉崎正治が宗教を意識するようになった原点は京都の生家であると言える。この原点と姉崎の宗教意識の萌芽との関係を考察するため、彼の死去後に刊行された自伝書『新版 わが生涯』（一九七四）の次のような回想に注目したい。

自分が、宗教学に志したもとの起りは、姉崎家の家系による。

姉崎の家は、上総の姉ヶ崎から出たという事であるが、その間全く空虚の時代がある。そして、家系が明かになって以来は、仏光寺派の絵所であった。即ち、阿弥陀如来の像を書いて、門徒に供給する役目であった。その初めは、幕初、延宝年間古文書で姉崎永喜という人に、東寺から貰った絵所の辞令である。この永喜という人は余程長命であったとみえて、三十余年後に死んでいるが、その時は既に仏光寺の絵所になっていて、それ以後は、戒名でみると、皆真宗の門徒であった……。そして、永喜から八代目が即ち、正治である。（注二）

姉崎家の家系が明らかになるのは、延宝年間の古文書で姉崎永喜（一七二九）が、東寺から浄土真宗仏光寺派の絵所（本尊の阿弥陀如来の像を描いて、門徒に提供する仕事）の辞令を受け取ったことである。姉崎家の『文化十四年 明治五年 年回忌引』（東京大学文学部宗教学研究室に保管）には、「享保十四年酉年三月五日 — 永喜 同八十九年三」、「宝暦四戊年八月十九日 — 永喜 同八十九年三」、「宝暦四戊年八月十九日 — 永喜 同六十四年（以下略）」、「寛政十元酉年八月十九日 — 永喜 同廿九年五」、文化二丑年七月三日 — 永喜 同廿九年九月三日 — 永喜 同三十一一年」、「明治五申年正月十二日 — 永喜 同三十一一年」と記されている（注三）。永喜という戒名は、『新版 わが生涯』で言及した姉崎永喜を指す。永喜の没年の明治五年は、姉崎正治が誕生した一八七三年の前年である。姉崎正治の自伝書によれば、この前年に彼の祖父の姉崎織衛（一八七二）が死去している。そこで、永

証永は姉崎正治の祖父である。姉崎正治の述懐を参考にして祖父が六代目だとすれば、初代から順に、釈永喜、釈永仙（一七五四）、釈永正（一七八九「寛政元」）、釈永寛（一八〇五「文化二」）、釈永見（一八四二「天保十三」）、釈証永「姉崎織衛」、姉崎正治の父親の姉崎正盛（一八三七「天保八」一八一「明治十四」）となる。釈永喜から釈証永までの戒名には真宗特有の「釈」が付いているので、これらの先祖は、姉崎正治が述べるように、同宗の門徒として仏光寺派の絵所を家業としていたと言える。

姉崎正治の生家では、父親の姉崎正盛、母親の姉崎楚天（一八五

一—一九一七）、祖母の姉崎由多（二八一—八九三）が住んでいた。

姉崎正盛の仕事は、釈永喜から釈証永まで営まれてきた絵所である。『正盛親族書』（東京大学文学部宗教学研究室に保管）によれば、姉崎正盛は「若州大飯郡廣岡村郷土」（注四）と記されている。この記述は、「父は若狭の豪士、佐分利村から来た人であった」（注五）という姉崎正治の回想を裏づけている。姉崎正盛が描いた絵は、真宗の本尊の阿弥陀如来、宗祖の親鸞、歴代の門主の肖像などであり、当時の門主によって署名されて信徒に配布されている。姉崎正盛の絵所は、仏師・表具所・和讃所と共に御譜代四職と位置づけられる重要な職掌を担うほどの腕前である（注六）。

姉崎家の『文化十四年 明治五年 年回忌』（東京大学文学部宗教学研究室に保管）では、「弘化四末年十二月十四日 — 釈妙詮童女・・・」、「同五年申五月廿日日 — 釈妙覺童女・・・」、「嘉永二

酉年七月十晦日 — 釈永秀童子・・・」と記録されて（注七）、祖父母が子供たちを亡くしたことが読み取れる。『楚天親族書』（同研究室に保管）では、姉崎織衛について「元彦根藩家中 橋本亡弥衛門倅・・」（注八）と書かれ、姉崎由多について「閑院宮御内 竹原外記妹」（注九）と書かれている。そこで、姉崎正治の祖父母の姉崎織衛と姉崎由多はそれぞれ、彦根藩橋本家と、閑院宮（四親王家の一つ）に仕えていた竹原家から姉崎家に養子となつている。仏光寺が発行する『佛光寺辞典』は、「姉崎の」母は京都西徳寺より嫁している」（注一〇）と記している。これらの事柄から、姉崎楚天は姉崎家の跡取り娘となり、姉崎正盛を婿として迎え入れたと考えられる。姉崎正盛が激しい下痢で衰弱して急逝した後、楚天は十軒の借家から収入を得たり絵所を守つて仏画を分け与えたりして、家計を支えている（注一一）。

生家で姉崎正治を躰したのは、もっぱら祖母の姉崎由多である。彼は『新版 わが生涯』の中で、その躰について次のように述べている。

宗教的感化としては、自分の幼時には、南無阿弥陀仏を唱えたが、敢てその信仰に傾いたのではなく、殊に祖母は極めて敬虔の人であつたが、敢て宗義をもつて教育したのではなく、今も尚生き生きと覚えているが、勤行の時に手を合せながら、如来様は実はお慈悲のかたまりだと教えられ、お慈悲という意味は分からぬながらに、只何となく親しい感をした。（注一二）

子供の時には祖母が家の中心で、その敬虔な風で育った。朝夕二度は必ず勤行し、先に述べた、如来様はお慈悲のかたまりだという話も、その勤行の時聞いたのである。(注一三)

その祖母が極めて敬虔の念の深い人であったので、その感化を自分は受け、祖母に伴われてお寺詣りをし、説教を聴いて、だんだんに宗教心の芽生えが出来たのである。(注一四)

姉崎由多は孫の姉崎正治に、家で朝夕に勤行させたり、近くの仏光寺へお参りさせたりしている。祖母の躰によつて、彼の心の中に信仰心が芽生えている。姉崎正治の信仰心の芽生えはまた、彼が生家の絵所を觀察していたことと深く関係しているであろう。

姉崎が生まれた一八七三年の一月、梓巫・憑祈禱・狐下げなどが迷信として禁止され、布教が教導職に限定される。同年二月、キリスト教禁止の高札が撤回される。一八七七年十月、教部省が廃止され、内務省事務局が設置される。このような国内の宗教改革の嵐とは無縁に、彼は京都で、真宗を中心とした宗教的雰囲気に包まれながら幼少期を送っている。

## 二 平井金三の宗教論

姉崎正治は、一八八三年三月に自宅の近くの豊園小学校初等科を修了したとき京都の下京区三十余校で首席であったが、入学成績が十分でなかったため一八八七年九月に大阪の第三高等中学校別科三級へ仮入学する(注一五)。入学試験がよくなかったことに加えて、

親元を離れ大阪に在学することが気がかりとなったり、いつも同じ内容を読ませていた英語の教師の怠け癖に嫌気をさしたりして、彼は翌年八月にこの中学校を退学する(注一六)。

京都に戻って英語を向上させるため、十四、十五歳のとき姉崎は一八八五年に在野の英学者の平井金三(一八五九—一九一六)が開設した私塾のオリエンタルホールに通っている。姉崎は『新版わが生涯』の中で、この私塾の授業について次のように思い出している。

予は元来特別仏教に関係のある家に生まれれば幼少の頃より仏を礼拝することを習ひ、無邪氣にして忠実なる心をもて信仰しつゝ々ありき、然るに十四五歳の頃、某「平井金三」氏につきて英学を研究しつゝありしが某人は大のスペンサー主義にて、凡の事柄は何でも進化論にて解釈せらるゝ由を言はれ宗教の如きも亦進化論にて立派に説明せらるゝとの意見を聴きたれば其頃よりして幼児の信念やゝ薄らぎ往く……。(注一七)

ここで、姉崎に生家で仏様を礼拝する信仰心を薄らぎさせるほどの強い影響を与えた平井の教育を検討してみたい。平井は、一八七一年に京都の独逸学校へ入学するが、英語に興味を示して二年後に英学校へ移る。しかし彼は、試験制度がある英学校を嫌う。それは、試験合格だけが目的となつて、十分な学びができないからである(注

一八)。そこで外国人から英語を学ぶため遊学した長崎で、彼らが日本人に対して行う野蛮な扱いに憤慨する。平井が死去した際、この憤慨について、オリエンタルホールの卒業生で、後に仏教学者・教化運動家となつた加藤咄堂(二八七〇—一九四九)は次のように述べ懐する。

中学を終りて長崎に遊び交を外国人に結びて語学を研鑽すと

雖も、其の所謂文明国民なるものが、常に邦人を野蛮視し、事毎

に侮辱の意を寓するを憎み、慷慨私に邦家のために此の屈辱を

雪がんと欲し、偶ま外教の浅薄不合理にして我が仏教に劣るこ

と数等なるを見るや、「新約全書弾駁」なる一書を著し、堂々

の議論を以て破邪の鉄槌を彼等の頭に加へ、自ら同志を募りて

杞憂会を組織し、殆んど長崎市民全体を会員として、我が宗教の優勝を示す、当時欧化主義盛んにして仏教の如きは人の顧るものなし(注一九)。

加藤の述懐で注目されるのは、平井が長崎で日本人を野蛮視したり侮辱したりする外国人の非道な姿を目撃して、彼らの思想の抛り所であるキリスト教に反対する行動を起こしたことである。その行

動が、「新約全書弾駁」の公表と杞憂会の組織となつて表れている。「新約全書弾駁」は『耶穌偽教新約全書弾駁』(二卷)(一八八三)である。卷一では、次のような内容が書かれている。

凡ソ宇宙ノ万事万物皆是レ自然ノ理ニ合セザル者ハ真正ニ非ズ今仏宗教ハ自然ノ理ニ依テ説ク者也故ニ是ヲ自然理教又ハ天地公道ノ真慈教ト称スルモ可也蓋シ仏宗教ニ在テハ唯非有非無ナル理ヲ以テ教ノ基本トス此ノ非有非無ノ理ヨリ万法ヲ変現ス此因縁ノ風ニ依テ非有非無寂理ノ水ヨリ万法ノ波動ヲ生ズ別ニ能造者ノ力ヲ借ラズ唯非有非無理ヨリ万法当然トシテ生ズ其生ズル万法宛然トシテ生ズ其生ズル万法宛然トシテ空ナリ此因縁生ノ故ニ非有非無ノ理ヲ教ノ基礎トス豈自然ノ理ニシテ天地万物ヲ生スルニ契応スルニ非サヤ……。(注二〇)

仏法ハ宇宙万理ノ無盡蔵ニシテ開闢以前已ニ宇宙ノ中ニ備ル理法ナリ……。(注二一)

平井は、仏教の中心的思想である〈因縁〉と〈空〉が宇宙万理における自然の理に適していることを述べて、仏教の真正を主張する。この主張によつて、彼が日本の伝統的な仏教が優れた宗教であることを説くばかりではなく、このような仏教を信仰する日本人が外国人から卑下されるような国民では決してないことを示唆するこ

とも読み取れる。

一九〇〇年、平井は杞憂会を組織した背景を次のように英語で書いている。

I even went so far that I organized a popular society in opposition to Christianity. That the foreign governments did not comply with the proposal of Japan in regard to treaty revisions was owing to several causes, among which the fact that our country is outside of Christendom was the important one. (注二二)

私は、キリスト教に反対して、大衆団体を組織させました。外国諸国が条約改正に関する日本の提案に応じなかったことは、いくつかの理由によった。その中で、わが国がキリスト教国でないという事実は重要なものであった。(拙訳)

「大衆団体」は杞憂会を指している。一八五八年、徳川幕府は五カ国(アメリカ、ロシア、オランダ、イギリス、フランス)と通商条約を結んでいる。この通商条約は、三項目(外国への治外法権の適用、外国との協定税率、無条件の最恵国待遇条約の承認)を含んでいた。日本側に不利な不平等条約であった。そこで杞憂会の目標は、徳川幕府が欧米諸国と結んだ不平等条約を改正して、日本が諸外国から文明国家として認められることである。諸外国がこの改正に同意しないのは、平井が右の英文で指摘するように、日本がキ

リスト教国でなかったからである。当時、万国公法という国際法は西洋諸国のみに適用された。西洋諸国で構成される文明国家には国家主権が認められ、たがいの政治的自立が尊重される。しかし、その一方で未開国は主権者のいない未開拓の領域とみなされ、文明国による植民地化の対象とされる。また、両者の中間に位置する万国は半文明化の国土とされ、主権は制限されたかたちでしか認められず、文明諸国による管理のもとにおかれることになる(注二四)のである。このような万国公法の実施の有無から判断すれば、日本は、明治政府が存在するとはいえず、外国人によって半文明化された野蛮国と見なされたとと言える。そのことは、平井が長崎で目撃したこと(外国人の日本人への卑下した態度)に反映されている。

外国人の文明の背後にあるキリスト教に対して嫌悪感を抱き、日本古来の仏教の優秀さを説く平井は、京都で新島襄(一八四三—一九〇)がキリスト教系の同志社英学校(一八七五年に設立)を開いているのを知る。この学校に対抗して、彼は当地に、仏教系のオリエンタルホールを開設する。先の姉崎の追憶によれば、この私塾で、イギリスの社会学者ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の進化論に基づく授業が行われている。一八八〇〜九〇年代の日本では、スペンサーの著作が多く翻訳されるほど、社会進化論に依拠した彼の社会有機体説が流行していた(注二五)。この流行を敏感に感知して、平井はスペンサーの社会進化論を反映した私塾を運営する。スペンサーが「進歩について—その法則と原因」(*Progress: Its Laws and Cause*, 1853)の中で、「同質から異質への変化は、文明全体の進歩の中にも、各種族或いは各国民の

進歩の中にも等しく見られ、現在なお加速的に進歩している（注二五）という社会進化論を背景に、平井はオリエンタルホールを發行所とする雑誌『活論』二号に「総合宗教論」（一八九〇）を發表する。そこでは、「是ニ依リテ儀式宗教ニハ色々ノ種類アリ、從テ色々ノ名称モ有ルコトナレドモ、詮スル処其大体ノ性質ニ至テハ異ナルコトナク、同一点ヨリ發シタル一線中二種々ノ形状ヲ顯シタル者ナルノミ」（注二六）と書かれていた。彼は点と線を持ち出して、宗教の形態を説明している。その説明は、スペンサーの社会進化論に依存した宗教の發達（同質の状態から異質の状態への変化）を踏襲している。幼少期の姉崎は祖母を介して、阿弥陀如来をはじめとする仏様を礼拝するという信仰を抱いていた。それは、彼が仏様の変わらぬご利益を教えられていたことを意味する。その後、彼はオリエンタルホールで、スペンサーの社会進化論を反映した平井の授業に関心を示して、進化について興味を覚えるようになる。そうした興味は、姉崎が幼年期から抱き続けた信仰が次第に薄らいでいったと思われる。その結果、彼は宗教の發達という考え方について魅せられたであろう。そのことは少年期の姉崎に、拝む仏教から論理的に考える宗教を意識させている。

### 三 二人の僧侶の話

オリエンタルホールに通っていた頃、姉崎正治の記憶に強く焼くつく出来事が起っている。彼は『新版 わが生涯』の中で、その出来事を次のように思い起こしている。

一家は真宗信者として、敬虔な家庭であったが、それ以外にも、わが家と僧侶との関係は頗る強く、僧侶がわが家に入入りしたうちで、今も尚記憶に残るのは、有馬憲文と善連法玄の二人で、時々出入りしてその頃の東京の学風の話をした。それは哲学館の出来た頃で、自分の考えている様な学問は哲学だと知った。しかし、ただ哲学でなく、やはり宗教だという事をぼんやりながら考えたのは善連の影響であった。

即ち、トルコの軍艦が破船して、乗組の軍人を、比叡、金剛の二艦でトルコに送りかえした時、善連はそれに乗り込んでフランスに行つて、フランスの博物館の仏画の前で勤行をしたという物語りをした事がある。それが、自分には中々の感化を与えた。その博物館はミュゼ・ギメイで、自分ものにフランスに行つて、その時ギメイ博物館はパリに移っていたが、善連が法要を営んだその仏壇の前に立つたことを覚えていた。この話と哲学館の話が一緒になって、自分は何かそういう方面の学問をするのだと考えた。（注二七）

姉崎家が仏画を扱う絵所であるため、そこに僧侶たちが出入りしている。中でも有馬憲文（生没年不詳）と善連法玄（同）が姉崎家に伝える東京の学風は、一八八七年に仏教哲学者の井上円了（一八五八—一九一九）が創設したばかりの哲学館（東洋大学の前身）についての様子である。一八八七年（姉崎が十四歳）に着目すると、少年期の彼は、二人の僧侶からの話に感銘している。当時の井上の哲学思想に注目して、二人の僧侶が姉崎に伝えた内容を推し測るこ

ととする。

一八八七年、井上は越後の長岡藩（現在の新潟県長岡市）にある真宗大谷派の慈光院に生まれる。幼名は岸丸、後に襲常、得度して円了と称する。井上の『仏教活論序論』（一八八七）に記述された内容（注二八）を参考にして、彼の生い立ち以後の人生に注意を払ってみよう。明治維新以前、仏教の教育を受ける。廃仏毀釈のあおりで、仏教に真理を見出せずに儒教を修めたが、儒教も純全の真理でないと考えた。真理をキリスト教に求めて、英学を勉学する。しかし、この宗教にも満足を得られず、真理は哲学の研究にあると判断する。そこで、一八八五年に仏教を改革して世界の宗教にしようと決心する。その理由は、彼が抱いていた当時の既成仏教に対する不満である。その一端は『破邪新論』（一八八五）の中で、「仏者ハ依然旧ヲ守リ高臥安眠更ニ護法ノ策ヲ講セス」（注二九）という彼の発言にうかがわれる。一八八五年は、彼が東京大学文学部哲学科を卒業した年である。卒業する頃、文部省（現在の文部科学省）へ採用される話があったが、「御思召は誠に有難いですが、素より私は本願寺の宗費生として大学に居た事であるから官途に就くに忍びないのみならず、且つは日頃の誓願として、将来は宗教的教育的事業に従事して、大いに世道人心の為に盡瘁して見度い心懸だから」（注三〇）と述べている。この「宗教的教育的事業」の着想が、後の哲学館の創設という形で実現することとなる。

哲学館の開館式が一八八七年八月三日に行われる頃、井上は二つの評論を発表している。それは、「生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同士に告ぐ」（一八八七）と、「生か将来の目的事業に

就て一言を述へ以て知友同士に告ぐ（承前）」（同）である。前者の評論では、「生は一昨明治二十年夏発起して世の晩学にして速成を求むる者、貧困にして大学に入るの資力なき者、洋語に通せずして原書を解せざる者等に哲学諸科を教授する為め論理学、心理学、倫理学、審美学、社会学、宗教学、教育学、政理学、法理学、純正哲学、日本哲学、支那哲学、印度哲学、及び是等と直接の関係を有する諸科を研修する私立学を創設せり、之を哲学私立学を創設せり、之を哲学館と称す」（注三一）と述べられている。この記述で注目されるのは、向学心に燃える者なら誰にでも、様々な領域に関する授業を開放する井上の大胆な教育方針である。このような教育方針に共鳴して、全国から多くの受講生が集まっている。後者の評論では、宗教に関して次の四点が主張されている。①宗教は「他の百般の事物の変化の精神中に一種不変の精神を保続するの性質あり。故に此宗教固有の性質ハ、国家発達の元素に加ハリて、其形質事情の諸変化ヲ連続して散失せらしむるに大に力あるものなり」（注三二）。②「宗教ハ真理已に一定し、衆人皆其一真理に帰して、合同するを要するを以て、衆人互に相一致し互に相結合するの傾向あり。此傾向亦大に一国の人心を結合して、互に相離散せざらしむるに加ハリて力あるものなり」（注三三）。③「宗教ハ不然、貧富貴賤を論せず、賢愚利鈍を別たす、皆同一に其理を解し、其樂を受くべきものにして、別して宗教の益ハ愚民下等社会の心中に入りて、其精神を支配するにあり」（注三四）。④「宗教の思想は人の精神に発し、宗教の変化は人の精神を動かし、宗教と精神とは密接に関係する」（注三五）。これら四点を要約すれば、宗教は国家の発達の原動力となり、卑賤に



関係なく人々の団結力や人心の原動力にもなる、ということである。

では、井上円了は学問としての哲学と宗教の性質との関係をどのように考えていたのであろうか。その考えは、井上が著した『眞理金針統編』(二八八六一―八七)に見出される。そこでは、学界が理学と哲学に分けられる。理学が理論(純正理論)と実際(製造学、器械学等)に細分化され、哲学が形而下哲学と形而上哲学に細分化される。形而下哲学が理論(心理学)と実際(倫理学、論理学等)に区分され、形而上哲学が理論(純正哲学)と実際(宗教)にさらに区分される(注三六)。形而上哲学の区分について、「宗教の眞理を定むるものは純正哲学にして純正哲学の實用を示すものは是れ宗教なる」(注三七)と書かれているように、純正哲学が宗教の眞理の理論面を扱い、宗教がその理論の實際面を扱うのである。有馬憲文と善連法玄は少年期の姉崎に、前述した事柄(哲学館の設立理念、宗教の性質、宗教の眞理の理論面としての哲学、その理論の實際面としての宗教)を語ったであろう。

善連が姉崎に話す内容は、一八九〇年九月十六日に起こったエルトゥールル号遭難事件に関することである。オスマン帝国海軍の軍艦エルトゥールル号が台風に遭遇したため、日本の紀伊大島(和歌山県東牟婁郡串本町の沖合)で座礁し沈没する。同年十月五日、明治政府のコルベット艦の比叡と金剛は、生存者を母国の首都のイスタンブルに送り届ける。『新版 わが生涯』の中で姉崎の記憶を参考にすれば、善連はどちらかのコルベット艦に乗って、フランスのギメ東洋博物館(Musée Guimet)まで行き、仏画の前で勤行をしたことになる。姉崎は、二人の僧侶の話を紹介する引用文の後に第三

高等中学校の入学(一八八八年)と卒業(一八九三年)に触れているので(注三八)、善連の法要の話と同中学校の在学中に知ったと思われる。おそらく彼は、ギメ東洋博物館での善連の法要を宗教の眞理の理論の實際面として判断し、そうした宗教の性質を学問として勉強しようと考えたのであろう。この考えの下地となるのは、彼が十四、十五歳のときにオリエンタルホールで平井から宗教の進化の話聞いたことである。

このように、幼少期の姉崎正治の宗教意識が形成される原点は、生家での家族の者(両親、祖母)の厚い信仰心であった。生家に入りする僧侶の中で二人の話が少年期の姉崎に、学問として宗教を考えるきっかけを与えた。同じ頃に通った私塾での平井金三の授業が彼に、宗教の進化についての科学的な理解の仕方を教えた。姉崎の宗教意識は、幼少時代を過ごした生家での家庭環境によって形成されたと言えよう。

おわりに

一八八六年十一月、中学校令により、近畿・中国・四国にまたがる第三区が定められ、高等中学校が京都に設置される。そのため一八八九年九月、大阪の第三高等中学校が京都に移転する。姉崎正治は京都の第三高等中学校へ生家から通学しないで、同高等中学校の近くの聖護院村や吉田村に下宿したり(注三八)、後に寄宿舎に入ったり(注三九)する。これは、両親と祖母の庇護のもとで育った彼が自立しようとする成長の表れである。

姉崎の自立心は、彼が発起人となって校内に仏教青年会を組織す

る行動にも見られる。仏教青年会は、組織の一員で、後に歴史学者となる喜田貞吉（一八七一—一九三九）の回想によれば、共に浄土宗本願寺派僧侶である齊藤聞精（一八四〇—一九〇四）と赤松連城（一八四一—一九一九）を招いて、仏教に関する連続講義を企画している。哲学館が創設された一八八七年頃、姉崎は特に善運法玄の話から宗教というものを考えるようになっていた。姉崎の校内活動は、第三高等中学校が一八八九年九月に京都へ移った以降の出来事なので、善連の話が直近の影響である。この校内活動の影響の土台は、絵所であった生家で仏教と触れ合った暮らしに認められよう。このように、姉崎の宗教意識の形成は、生家での家庭環境を基点としていることを再認識することができる。

注

- 一 この点については、拙稿「幼少時代における姉崎正治の宗教意識の萌芽」『言語文化学会論集』四二、二〇一四年に記述された内容を踏まえていることをお断りしたい。
- 二 姉崎正治著・姉崎正治先生生誕百周年記念会編『新版 わが生涯』大空社、一九七四年、三頁。
- 三 金子奈央・曾部珠世『姉崎家譜』について『東京大学宗教学年報』一九、二〇〇二年、三五頁。
- 四 同右、三六頁。
- 五 姉崎・姉崎正治先生生誕百周年記念会前掲『新版 わが生涯』九頁。

六 磯前順一・高橋原・深澤英隆「姉崎正治伝」（磯前・深澤編『近代日本における知識人と宗教―姉崎正治の軌跡―』東京堂出版、二〇〇二年、六一―七頁）。

七 金子・曾部前掲『姉崎家譜』について 三六頁。

八 同右、三六頁。

九 同右、三六頁。

一〇 渋谷有数編『佛光寺辞典』仏光寺、一九八四年、二頁。

一一 姉崎・姉崎正治先生生誕百周年記念会前掲『新版 わが生涯』一一、七三―七四頁。

一二 同右、三頁。

一三 同右、一〇頁。

一四 同右、七三頁。

一五 同右、一二頁。

一六 同右、一二頁。

一七 編集者（匿名）「姉崎博士の信仰談」『基督世界』一一八〇、一九〇六年、五頁。

一八 平井金三「予が立脚地」『東洋哲学』七―五、一八九〇年、二〇八―〇九頁。

一九 加藤咄堂「嗚呼平井金三先生」『新修養』七、一九一六年、六四頁。

二〇 平井金三『耶穌偽教新約全書弾劾』（卷一）成文舎、一八八三年、七頁。

二一 同右、一二頁。

二二 Kinza Hirai (平井金三) "Sketch of the Life of Kinza Hirai"

(神田佐一郎編 *The Unitarian Movement in Japan* 日本ゆ  
にてりあん協会、一九〇〇年、六〇頁)。

二三 磯前順一「近代における「宗教」概念の形成過程」(小森陽一・

千野香織・酒井直樹・成田龍一・島園進・吉見俊哉編『岩波

講座 近代日本の文化史三 近代知の成立一八七〇—一九一

〇年代一』岩波書店、二〇〇二年、一六五—一六六頁)。

二四 一八七七年から一九〇〇年の間に、三二の翻訳、一冊の研究書、

多数の論文が出版されている。永井道雄『近代化と教育』東京

大学出版会、一九七二年「初出一九六九年」、一五二頁)。

二五 清水礼子訳「進歩について」(清水幾太郎編『世界の名著三六

コント、スペンサー』中央公論社、一九七〇年、四〇六頁)。

二六 平井金三「総合宗教」『活論』二六、一八九〇年、一三頁。

二七 姉崎・姉崎正治先生生誕百周年記念会前掲『新版 わが生涯』

三一—四頁。

二八 井上円了『仏教活論序論』哲学書院、一八八七年、一五—一九  
頁。

二九 井上円了『破邪新論』明教社、一八八五年、一頁。

三〇 石黒忠恵談(三輪政一編『井上円了先生』大空社、一九九三年、  
八六頁)。

三一 井上円了「生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同  
士に告ぐ」『日本人』三〇、一八八七年、六頁。

三二 井上円了「生か将来の目的事業に就て一言を述へ以て知友同  
士に告ぐ(承前)」『日本人』三一、一八八七年、一二頁。

三三 同右、一一—一三頁。

三四 同右、一三頁。

三五 同右、一三頁。

三六 井上円了『真理金針続編』法蔵館、一八八六—一八八七年、三八頁。

三七 同右、四八頁。

三八 姉崎・姉崎正治先生生誕百周年記念会前掲『新版 わが生涯』

二八、三七頁。

三九 同右、二八—二九、三七—三八頁。

四〇 喜田貞吉『六十年の回顧』喜田貞吉発行、一九三三年、七一頁。